

シジミの最新事情

主任研究員 田口さつき

1 減少する家庭でのシジミ消費

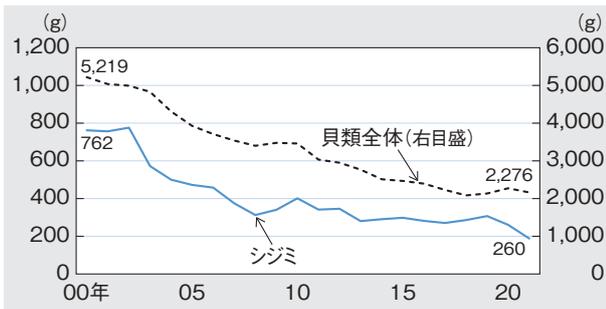
シジミは、縄文時代から食べられてきた日本人にとって馴染みの深い食材である。ただ、総務省「家計調査年報」によると、2人以上の世帯(注)において、1世帯当たりのシジミの購入量は、世帯人員数の減少もあり、ここ

20年間減少を続けている(第1図)。貝類全体でも同様の傾向にある。

購入された貝類の内訳について2000年と2020年を比較してみると、全体に占めるシジミの割合は00年の14.6%から20年には11.4%となっている(第1表)。その一方、ホタテ貝やカキの割合が上昇している。

価格で見ると、シジミはホタテ貝やカキよりも低いですが、20年前と比べて値上がり幅が大きい(第2表)。このようなシジミの割安感がなくなったことが、シジミの占める割合の低下に影響しているとみられる。また、ホタテ貝、カキは粒が大きく、むいた状態で販売されていることが多い。家庭での調理、廃棄の

第1図 1世帯当たりのシジミの年間購入量(2人以上の世帯)



資料 総務省「家計調査年報」(令和3年)より作成

第1表 貝類の年間購入数量の内訳

(単位 g、%)

	2000年		2020年	
	数量	構成比	数量	構成比
アサリ	2,080	39.9	743	32.6
ホタテ貝	844	16.2	571	25.1
カキ	921	17.6	436	19.2
シジミ	762	14.6	260	11.4
他の貝	613	11.7	243	10.7
貝類	5,219	100.0	2,276	100.0

資料 第1図と同じ
(注) 端数処理のため、構成比の合計が100%にならない場合がある。

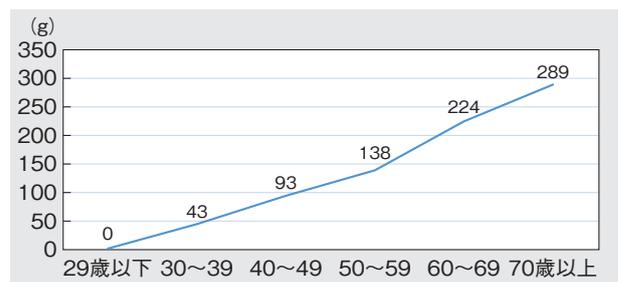
第2表 各貝類の価格の推移

(単位 円、倍)

	2000年 平均価格①	2020年 平均価格②	価格比 ③=②÷①
アサリ	79.84	104.74	1.31
ホタテ貝	183.46	215.25	1.17
カキ	167.31	180.55	1.08
シジミ	98.27	141.13	1.44

資料 第1図と同じ
(注) 価格は100g当たりである。

第2図 世帯主の年齢階級別シジミの年間購入量(2021年)



資料 第1図と同じ

第3表 県庁所在地別1世帯当たりのシジミの年間購入量(2021年)

(単位 g、%)

	シジミ	貝類	全体に占める シジミの割合
松江市	1,681	3,351	50.2
水戸市	715	1,912	37.4
青森市	701	3,498	20.0
秋田市	486	2,574	18.9
鳥取市	438	2,229	19.7
(参考)全国	188	2163	8.7

資料 第1図と同じ
(注) 2人以上の世帯である。

第4表 シジミ生産量上位道県(2021年)

(単位 t)

島根	4,171
青森	2,228
茨城	1,413
北海道	570
鳥取	283
(参考)全国	8,940

資料 農林水産省「令和3年漁業・養殖業生産統計」より作成

面からもシジミが敬遠されがちになったと思われる。

ただし、シジミを強く支持する消費者は少なくない。例えば、世帯主が高年齢の世帯でシジミの購入量が多い(第2図)。

また、シジミの購入量は都道府県別県庁所在市ごとにみると、松江市、水戸市、青森市、秋田市、鳥取市で他を大きく引き離している(第3表)。特に松江市は、貝類の購入量の半分がシジミである。秋田市を除き、これらの市はシジミの生産量の多い県に属し、シジミが食生活に根付いているといえる(第4表)。秋田市は、大きな変動がありながらも八郎湖でヤマトシジミが漁獲されていた。

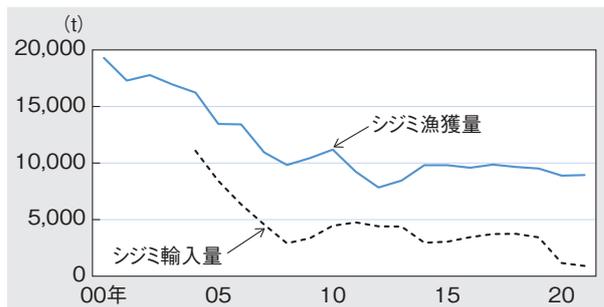
2 シジミの生産・輸入も減少

調査対象河川数の減少もあるが、シジミの漁獲量は、減少傾向にある(第3図)。00年に2万トン近辺だったものが、21年は8,940トンに減少している。

シジミの輸入量も減少している。近年では、19年の輸入量のうち、9割超を占めていたロシアからの輸入が20年から漁獲規制などで途絶えたことが影響し、1000トンを下回った。

(注) 令和2年国勢調査によると、一般世帯数は55,704,949世帯。うち、単独世帯は21,151,042世帯である。2人以上の世帯は一般世帯の6割程度である。家計調査は、統計理論に基づき選定された全国約9,000世帯を対象にしている。

第3図 シジミの漁獲量と輸入量



資料 農林水産省「海面漁業生産統計調査」、「農林水産物輸出入概況」より作成

(注) 1 シジミの生産量は、2000年は全ての河川・湖沼、01年～03年は主要148河川28湖沼、04年～08年は主要106河川24湖沼、09年～13年は主要108河川24湖沼、14年から18年までは主要112河川24湖沼、19年からは主要113河川24湖沼の値である。
2 シジミの輸入量は、活・生鮮・冷蔵・冷凍の合計である。

そのためか、シジミの価格も上昇傾向にある。過去には産地偽装問題なども生じた。国内産のシジミの確保が今こそ必要である。

3 シジミの生息域の改善が課題

日本に生息するシジミは、ヤマトシジミ、マシジミ、セタシジミの3種である。マシジミ、セタシジミは淡水のシジミである。一方、ヤマトシジミは、汽水域(汽水湖や河口域)に生息している。流通しているシジミの多くは、ヤマトシジミである。

高度経済成長期以降、河川改修・農地整備による護岸の直線・コンクリート化や3面護岸化などが進められ、治水や農業生産が安定した一方、シジミの生息に適さなくなった水域が増えた。

しかし、かつての産地では、シジミの復活を目指して漁業者をはじめとした人々が活動を行っている。特に河口域のヤマトシジミについては、河口堰の建設後、流量と土砂の供給が大きく変化している。そのため、水量調節が生態系改善の鍵を握っており、河川管理者との対話が続けられている。

(たぐち さつき)